

奈良県御所市室

中西遺跡

— 第2次発掘調査報告 —



平成2年3月

奈良女子大学蔵書



SS0002681005

御所市教育委員会

210.2

91

奈良県御所市室

中西遺跡

—第2次発掘調査報告—

平成2年3月

御所市教育委員会

序 文

このたび、御所市大字室自治会が計画した共同墓地拡張工事に伴う事前の発掘調査の成果を御所市文化財報告第9集として刊行致します。

中西遺跡は、巨大な前方後円墳、宮山古墳に近接することで、はやくから注目されておりました。今回の調査では、この古墳の築造期のみならず、弥生時代前期の遺構が検出されました。御所市において、弥生時代前期の遺構が検出されたのは、これが初めてのことであります。

本書が今後の調査・研究の一助になれば、幸いです。

また、今回の調査では、室自治会長・山崎三良氏をはじめ、同自治会の方々に多大なご理解、ご協力を頂きました。現地の調査でも、作業員・調査補助員の方々にご協力を頂きました。末筆ながら、記して深謝の意を表します。

御所市教育委員会

教育長 谷 村 忠 敬

例 言

1. 本書は御所市大字室自治会（会長・山崎三良）の依頼により、御所市教育委員会が実施した、中西遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 第1次調査は、国道309号線歩道工事に伴い、樫原考古学研究所が、同所・関川尚功氏を担当として、平成元年1月23日から同年2月28日まで、実施したものである。
3. 第1次調査地と第2次調査地の位置的関係は第1図に示した。
4. 本遺跡は、『奈良県遺跡分布地図』第3分冊、16-B-239に該当する。
5. 第2次調査は、御所市教育委員会・木許守が、同会・藤田和尊、藤田奈美枝、瀬川泰紀らの協力を得て、これにあたった。
6. 調査期間は平成元年11月7日から同年11月18日まで（実働8日間）であり、調査面積は292㎡である。
7. 現地調査には、西本実春、上口勝秀、柴田康幸、小出義弘、松尾弘海、平尾今日子、畑中紀吏子の参加、協力を得た。
8. 遺物整理および本書作成には、木許のほか藤田奈美枝、瀬川、平尾、藤村藤子、尾上昌子、木村美幸、畑中あたり、藤田和尊の協力があつた。
9. 遺物整理および本書作成に際して、樫原考古学研究所・関川尚功、芦屋市教育委員会・森岡秀人、関西大学・米田文孝、（財）八尾市文化財調査研究会・青木勘時氏の御教示を賜った。
10. 本書の執筆・編集は木許があたった。また製図はすべて藤田奈美枝が担当した。
11. 遺物の実測図の縮尺は $\frac{1}{3}$ に統一した。文中の遺物番号は挿図、図版中の番号ともすべて統一した。
12. 現地調査および本書刊行には、室自治会長・山崎三良氏をはじめ、同自治会の方々に全面的な御理解・御協力を頂いた。記して、謝意を表したい。

本文目次

序文	御所市教育委員会教育長 谷村忠敬
I 位置と環境	1
II 調査の契機と経過	4
III 調査の成果	4
(1) 層序	4
(2) 遺構	6
(3) 遺物	7
IV まとめ	13

挿図目次

図1 調査地と周辺地形	1
図2 周辺遺跡分布図	2
図3 遺構配置と地区名称	4
図4 土層断面図	5
図5 溝1実測図	6
図6 溝2実測図	7
図7 遺物実測図(溝1)	8
図8 遺物実測図(溝2上層)	8
図9 遺物実測図(溝2下層)	9
図10 遺物実測図(自然河道)	11
図11 遺物実測図(包含層)	12

図版目次

図版1	1 調査前全景(南東から)
	2 N.2区全景(南から)
図版2	1 N区全景(東から)
	2 E区全景(南から)
図版3	1 S区全景(東から)
	2 溝1検出状況(南上方から)
図版4	1 溝2検出状況(南上方から)
	2 溝2下層遺物出土状況
図版5	出土遺物
図版6	出土遺物
図版7	出土遺物

I 位置と環境

御所市は奈良盆地の西南部に位置する。西は葛城山・金剛山によって大阪との境をなし、東南部は竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵などが起伏し、北部は平な奈良盆地の一部を占めている。

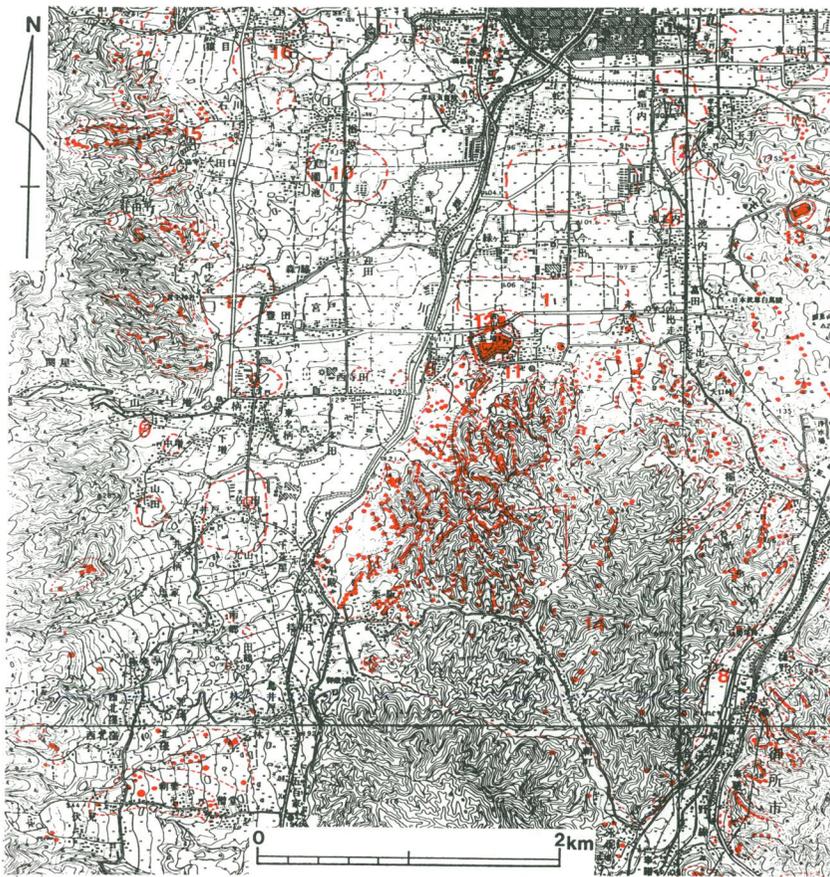
調査地は巨勢山丘陵の北辺部の、標高約111mの平地に立地する。遺跡の南には、ネコ塚古墳、宮山古墳が存在し、さらに巨勢山古墳群が広がる。

さて、調査地周辺の歴史的環境であるが、御所市における縄文時代の遺跡は、櫛羅遺跡⁽¹⁾、玉出遺跡⁽²⁾、石器の二次的加工を行ったと考えられる小林遺跡⁽³⁾などが知られるが、その絶対数も少なく実態はなお不明といわざるを得ない。

弥生時代の遺跡として、従来、鴨都波遺跡⁽⁴⁾、今住遺跡⁽⁵⁾、玉出遺跡⁽⁵⁾、池ノ内遺跡⁽⁴⁾、名柄遺跡⁽⁹⁾などが知られていたが、本文中に述べるように前期にさかのぼるものとして、今回、中西遺跡⁽¹⁾の存在を確認した。高地性集落では、吐田平遺跡⁽⁶⁾、葛城山山頂遺跡⁽⁷⁾、境谷遺跡⁽⁸⁾、国見山遺跡⁽⁹⁾、本馬丘遺跡⁽⁹⁾が知られ、近年、後期中葉から後葉にまで下る巨勢山中谷遺跡⁽⁷⁾を確認している。また、本年度の巨勢山古墳群の調査において、巨勢山中谷遺跡の、谷を隔てた北東の尾根上に、焼土坑2基を含む土坑6基を検出した。時期は、土器の出土が無いため、同遺跡との厳密な併行関係はいえないが、石棺の出土があり、また土坑群の位置する尾根上から同遺



図1 調査地と周辺地形 (S = 1 / 5,000)



1. 中西遺跡
2. 玉手遺跡
3. 鴨都波遺跡
4. 池ノ内遺跡
5. 半田平遺跡
6. 境谷遺跡
7. 巨勢山中谷遺跡
8. 古瀬遺跡
9. 名柄遺跡
10. 栢原遺跡
11. 宮山古墳
12. ネコ塚古墳
13. 掖上罐子塚古墳
14. 巨勢山古墳群
15. 石川古墳群
16. 櫛羅ナムギ遺跡
17. 森脇遺跡

図2 周辺遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)

跡が見通せ、同遺跡との関連でこれらの遺構を考えるべきであろう。

市内における古墳時代の遺跡は、前期では、栢原遺跡⁽¹⁰⁾の調査で、畿内第V様式、庄内式土器、布留式土器が出土しており、中期後葉から後期前葉の時期では、豪族の居館跡と考えられた名柄遺跡⁽¹²⁾がある。後期の遺跡は、古墳以外では調査例が少なく、その存在を知ることさえ困難である。ただ、葛城山東麓で櫛羅ナムギ遺跡⁽¹⁶⁾、森脇遺跡⁽¹⁷⁾の調査を行っている。いずれも極めて小規模な調査であったために遺構の検出はできなかったが、櫛羅ナムギ遺跡ではTK10型式を中心とする時期の、森脇遺跡においては6世紀代の土器包含層の存在を確認している。これら2遺跡には当該期の何らかの遺構が存在するものと考えられよう。

古墳については、前期に該当するものがなく、5世紀の前葉に至って突如として、全長238mの規模をもつ前方後円墳、宮山古墳⁽¹⁵⁾が築造される。また、本墳の陪冢の位置を占めるネコ塚古墳⁽¹⁶⁾は、表面採集資料に甲冑・刀剣類・鉄鏃の破片が知られる。当地における首長墓の系譜は、その後、掖上罐子塚古墳⁽¹³⁾に移り、更に新庄町域へと変遷するようである。一方、群集墳⁽¹⁸⁾は5世紀代に造営を開始する石光山古墳群があり、宮山古墳の背後には総数800基に達するかと考

(19)
えられる巨勢山古墳群(14)が存在する。また葛城山東麓でも多くの群集墳が形成される。

当地の奈良時代以降の遺跡は、詳細が不明であるが、鴨神遺跡⁽²⁰⁾の調査では谷地形の埋土から、7世紀から8世紀代の土器、土製品、木製品が検出され、付近に建物が存在したことが推定されている。また、前述の櫛羅ナムギ遺跡では、必ずしも単純層ではなかったが、中世の遺物包含層を確認している。今後当市においても当該時期の資料の蓄積がまたれよう。

- 註1 松並尚夫「葛城山麓発見の縄文式遺跡について」(『大和志第6巻第7号、1939年)
2 伊藤勇輔「御所市玉手 玉手遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1984年度』、1985年)
3 1986年 御所市教育委員会調査
4 吉村定治郎「鴨都波神社付近の遺物について」(『大和石器時代研究』、1939年、大和上代文化研究会)
網干善教「鴨都波遺跡」(『御所市史』、1965年)
堤賢二・菅谷文則・吉村雅博・吉田二良「奈良県御所市鴨都波遺跡出土の石戈」(『考古学雑誌』第59巻第3号、1973年)
伊藤勇輔『鴨都波遺跡－調査概報－』(1977年 御所市教育委員会)
伊藤勇輔「鴨都波遺跡発掘調査概報(県立御所高等学校内)」(奈良県遺跡調査概報1978年度』、1978年)
5 榎原考古学研究所 寺沢薫・林部均両氏の1987年の調査による。
6 関川尚功「総括」(『奈良県五条市引ノ山古墳群』、1980年)
7 松本俊吉「先史文化」(『御所市史』、1965年)
8 久野邦雄『大和巨勢山古墳群(境谷支群)－昭和48年度発掘調査概報－』(1974年)
藤田和尊「奈良県御所市室 巨勢山境谷10号墳発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第4集、1985年)
9 関川尚功「総括」(前出註6文献)
10 1988年 御所市教育委員会調査
御所市教育委員会『ゴルフ場開発事業に伴う第1回巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』1989年
藤田和尊「位置と環境」(前出註7文献)
11 1987年 御所市教育委員会調査
12 1987～88・1989年 御所市教育委員会調査
御所市教育委員会『名柄遺跡発掘調査現地説明会資料』(1989年)
藤田和尊「御所市・名柄遺跡の調査(コロタイプ図版解説)」(『考古学研究』第35巻第4号・1989年)
13 木許守「櫛羅ナムギ遺跡」(『御所市文化財調査報告書』第7集、1989年)
14 1989年 御所市教育委員会調査
15 網干善教「室大墓」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1959年)
16 藤田和尊「位置と環境」(前出註7文献)
17 奈良県「南葛城郡掖上村籬子塚古墳出土 鳥形埴輪」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査会抄報』第2輯)
網干善教「籬子塚古墳」(『御所市史』、1965年)
楠元哲夫「御所市掖上籬子塚前方部周濠発掘調査概報告」(『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1978年)
南葛城地域の古墳文化研究会「奈良県御所市掖上籬子塚古墳測量調査報告」(1986年)
18 白石太一郎・河上邦彦「葛城・石光山古墳群」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊、1976年)
19 網干善教「小殿古墳」(『奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編)』第3集、1960年)
網干善教「御所市小殿第二号墳」(『奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編)』第4集、1961年)
久野邦雄『大和巨勢山古墳群(境谷支群)－昭和48年度発掘調査概報－』(1974年)
千賀久・田中一広「御所市巨勢山古墳群(ミノヤマ支群)発掘調査概要I」(『奈良県遺跡調査概報1982年度』1983年)
田中一広「御所市巨勢山古墳群(タケノクチ支群)発掘調査概報－県道古瀬小殿線道路特殊改良工事に伴う調査－」(『奈良県遺跡調査概報1983年度』、1984年)
田中一広「奈良県御所市巨勢山古墳群調査概要II－分布調査及び條地区における発掘調査－」(『御所市埋蔵文化財調査概報58-1』、1984年)
藤田和尊「奈良県御所市室 巨勢山境谷10号墳発掘調査報告」(前出註7文献)
藤田和尊「奈良県御所市 巨勢山古墳群II－御所みどり台総合開発事業に伴う発掘調査1－」(『御所市文化財調査報告書』第6集、1987年)
20 榎原考古学研究所 佐々木好直氏の1989年の調査による。
榎原考古学研究所『鴨神遺跡説明会資料』(1989年)
佐々木好直「鴨神遺跡」(『御所市文化財報告書』第8集、1990年予定)

II 調査の契機と経過

平成元年8月9日、御所市大字室自治会、会長山崎三良氏より、御所市大字室字墓ノ本383番地・同382番地について、文化財保護法第五十七条の二に基づいて発掘届が提出された。当該地は『奈良県遺跡分布地図』第三分冊、16-B-239に相当し、中西遺跡として周知されている。このため事前に発掘調査が必要であると判断されることから、当委員会はこれを奈良県教育委員会文化財保存課に進達し、併せて発掘調査通知（同保護法第九十八条の二に基づく）を提出した。

工事は、共同墓地造成のため盛り土を行うものであるが、3者による協議の結果、墓地造成のための工事は盛り土内に収まるため、全面的な発掘調査は行わず、現地表面から掘削する擁壁部分のみ発掘調査を実施することとした。

同年11月8日、現地調査を開始、11月17日に終了した。実働日数は8日間である。

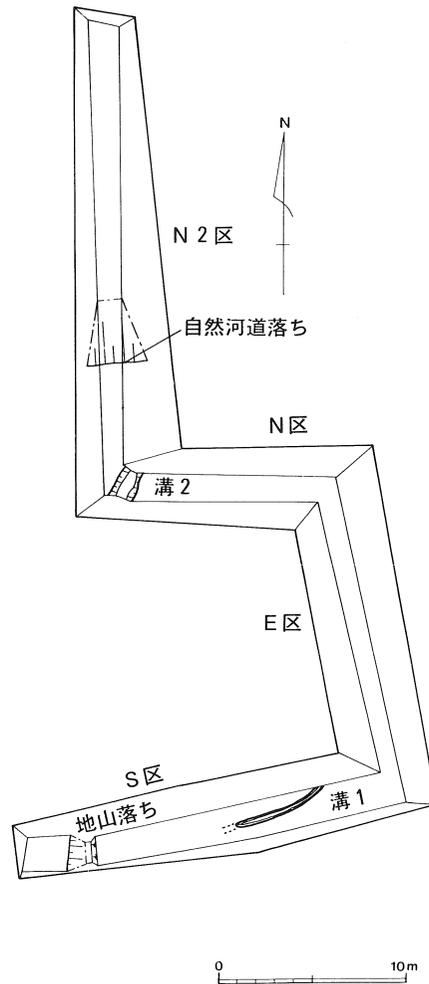
調査は調査区の設定から始めた。名称は第3図に示した通りとし、本書でもこれを用いた。擁壁はこのほかにN-2区

北端で東西方向に造成されるが、この部分は、後述するように、粗砂層が厚く堆積しており川地形と判断され、地山面までの深さが2.4m以上あり、かつ、西接して墓地の構造物がある。このため、北端部での東西方向トレンチは、掘削を断念した。

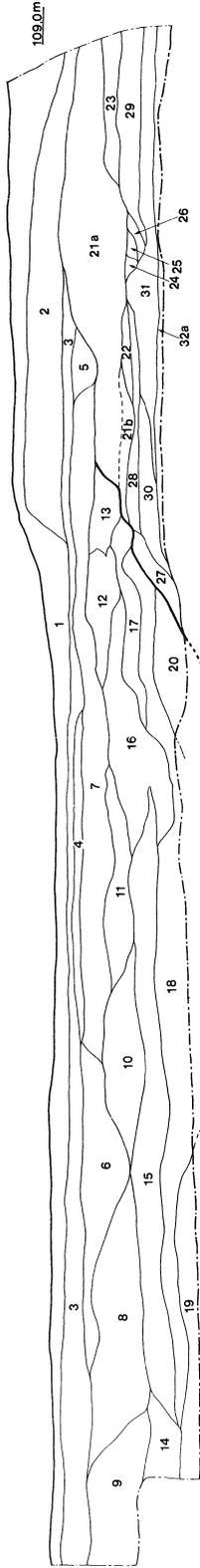
III 調査の成果

(1) 層序

調査区の南半部の基本層序は、上層より現代の耕作土、床土があり、間層となる第33・42・43層



第3図 遺構配置と地区名称 (S = 1/400)

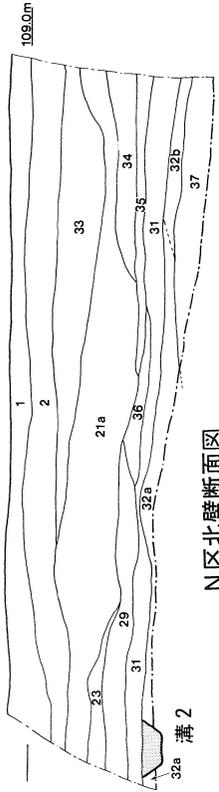


N 2 区東壁断面図

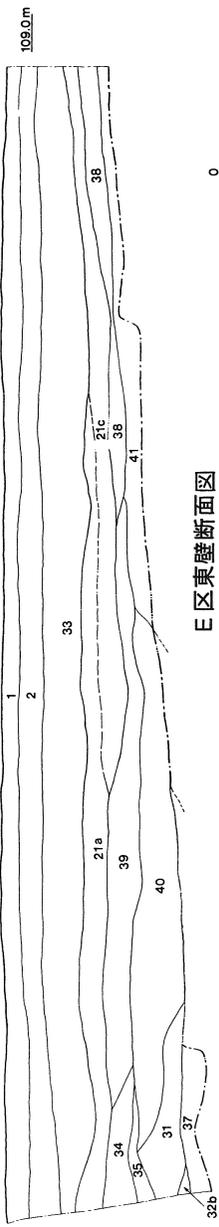
1. 暗褐色粘質土
2. 淡褐色粘質土
3. 暗赤褐色粘質土
4. 暗赤褐色粘質土
5. 暗赤褐色粘質土
6. 暗赤褐色粘質土
7. 暗赤褐色粘質土
8. 暗赤褐色粘質土
9. 暗赤褐色粘質土
10. 暗赤褐色粘質土
11. 暗赤褐色粘質土
12. 暗赤褐色粘質土
13. 暗赤褐色粘質土
14. 暗赤褐色粘質土
15. 暗赤褐色粘質土
16. 暗赤褐色粘質土
17. 暗赤褐色粘質土

18. 淡黄灰色シルト混り細砂
19. 白赤褐色シルト混り細砂
20. 赤褐色シルト混り細砂
21. 暗赤褐色シルト混り細砂
22. 暗赤褐色シルト混り細砂
23. 暗赤褐色シルト混り細砂
24. 暗赤褐色シルト混り細砂
25. 暗赤褐色シルト混り細砂
26. 暗赤褐色シルト混り細砂
27. 暗赤褐色シルト混り細砂
28. 暗赤褐色シルト混り細砂
29. 暗赤褐色シルト混り細砂
30. 暗赤褐色シルト混り細砂
31. 暗赤褐色シルト混り細砂

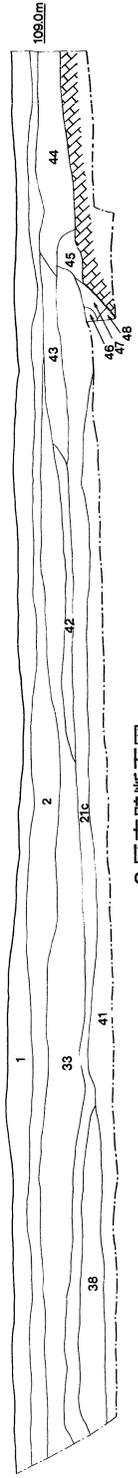
32. 黄灰色シルト
33. 淡黄灰色粘質土
34. 暗赤褐色粘質土
35. 暗赤褐色粘質土
36. 暗赤褐色粘質土
37. 暗赤褐色粘質土
38. 暗赤褐色粘質土
39. 暗赤褐色粘質土
40. 暗赤褐色粘質土
41. 暗赤褐色粘質土
42. 暗赤褐色粘質土
43. 暗赤褐色粘質土
44. 暗赤褐色粘質土
45. 暗赤褐色粘質土
46. 暗赤褐色粘質土
47. 暗赤褐色粘質土
48. 暗赤褐色粘質土



N 1 区北壁断面図



E 区東壁断面図



S 区南壁断面図

第 4 図 土層断面図 (S = 1 / 120)

をはさんで、弥生中期の遺物包含層となる。包含層は第4図に示した第21c層であるが、同層は色調を変えながら、E、N、N-2区まで連続する（第21a、21b層）ものである。同層の出土遺物には弥生前期から中期のものがある。S区ではこの包含層の直下で遺構（溝1）を検出した。この遺構がベースとする第41層は弥生前期の遺物包含層である。また、地山面はS区西端で現地表面から1m弱の深さにあったが、調査区の西端から約4mの地点より急に下がり、これより北東方向では検出し得なかった。

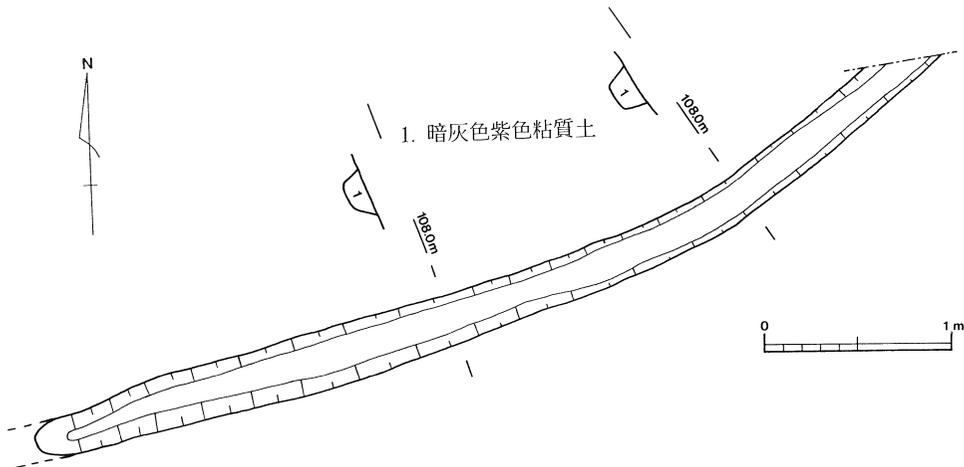
E区北端部及びN区では、前述の遺物包含層下に、褐色系の粗砂、粘土層などをはさんで、還元化された細砂層（第31層）があり、更にシルト（第32b層）、粗砂（第37層）の堆積が見られる。シルト層である第32b層は、西に行くに従い色調を褐灰色に変えるため、第32a層として区別したが、これらは同一層である。またこの第32a層はN区西半で厚みを増し、遺構（溝2）のベース面になっている。

一方、調査区北半部は、南端から続いてくる遺物包含層及びその下層の堆積土を切って粗砂を基本とする、河道により形成されたと考えられる砂層の堆積があった。この砂層中より布留式土器ほかを検出した。

（2）遺 構

溝1 S区の東半部で検出した。幅30cm、検出長約10mを測る。深さは最深で約13cmを測るが、西に行くに従い浅くなる。西半部は、東半部と同様の埋土が薄く堆積しているのを確認しているので、溝は調査区外、南西の方向に伸びるものと考えられる。また東端は、S区北壁から外に出るが、E区では、断面においてもこれを見いだし得なかった。東端部で湾曲して北に方向を変えつつあることから北方に伸びるものと考えられる。

溝の形成時期は、遺物が細片化しているものの、櫛描文をもつ土器の出土があること、弥生前期



第5図 溝1実測図 (S = 1/40)

の包含層上に掘られていること、溝1の埋土とその直上で検出した弥生中期の遺物包含層（第21c層）が同様の土であることから、弥生中期と考えられる。

溝2 N区西端で検出した。幅約1.1m、深さ約30cm、検出長1.6mを測る。N区を南西から北東に横断するものである。

埋土は3層に分けられ、遺物は第6図第1・2層より出土した。それぞれ上層・下層とする。出土個体数は、図化し得たもので22点あり、検出面積の割に多く、遺物は埋土中に密度高く遺存していた。出土状況は、下層では、遺構底より甕（第9図16）が押し潰されて、破片が周辺に散乱した状態で遺存した。この甕の破片は1個体の50%以上分に相当していることから、原位置から大きくは移動していないものと考えられる。下層では、

土器のほか、楔形石器を検出した。上層では、土器の破片が散乱した状態で出土した。破片の大きさは下層のそれに比して小さく、完形近くに復元できたものはない。検出面積が小さいために、厳密にこれらの遺物の性格をいうことはできないが、下層出土のものに破片の大きいものがあり、また上・下層を通じて密度高く遺物が存在したことや、楔形石器の出土は、これらの遺物がこの場所周辺に意識的に廃棄された可能性を示すものであろう。

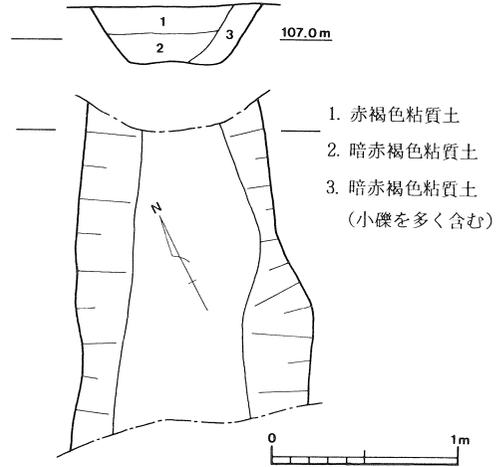
溝の形成時期は、これらの土器が弥生前期に相当するものであることから、当該期であると考えられる。

（3）遺物

出土遺物は、コンテナパットに計5箱程であった。多くは細片化していたが、16・25・35・37は、1/2以上が残存しており、47個体について図化し得た。土器は、弥生土器と布留式期の土師器に大別される。弥生土器の胎土は、全体に粗い砂粒を含有しており、19・20・39・43は、2mm以上の砂粒を多量に含む。またすべてに石英、長石、金雲母が含まれる。金雲母は多くの土器は微量であるが、7は比較的多く含み、16は多量に含んでいる。角閃石を含有するものは、2・11・18・17があるが、極微量である。一方、土師器は全体に密な胎土である。その中で、29のみが粗く2mm大の砂粒を多量に含んでいる。すべての土器に石英、長石、金雲母を含有するが、25・26・31の金雲母の含有は極僅かである。角閃石の含有が見られたのは46だけであった。

焼成については、概ね良好であるが、7・13・18・29についてはやや不良であった。黒斑は、3・4・5・7・8・12・16・17・25・26・28・36・37・38に認められ、実測図中にトーンで示した。

以下に、出土地点ごとに形態についての観察結果を述べる。



第6図 溝2実測図 (S = 1 / 40)

溝1 前述のように、検出した遺物はいずれも細片化していた。検出した破片は11点あるが、図化できたのは1点であった。図7に示したものは細頸壺である。口縁部は頸部から直線的に伸びて外上方に開き、端部はほぼ水平な面をなす。頸部上端に1帯11条（7本/cm）の櫛描直線文が2帯遺存していた。⁽¹⁾この土器は畿内第Ⅲ様式に比定できる。



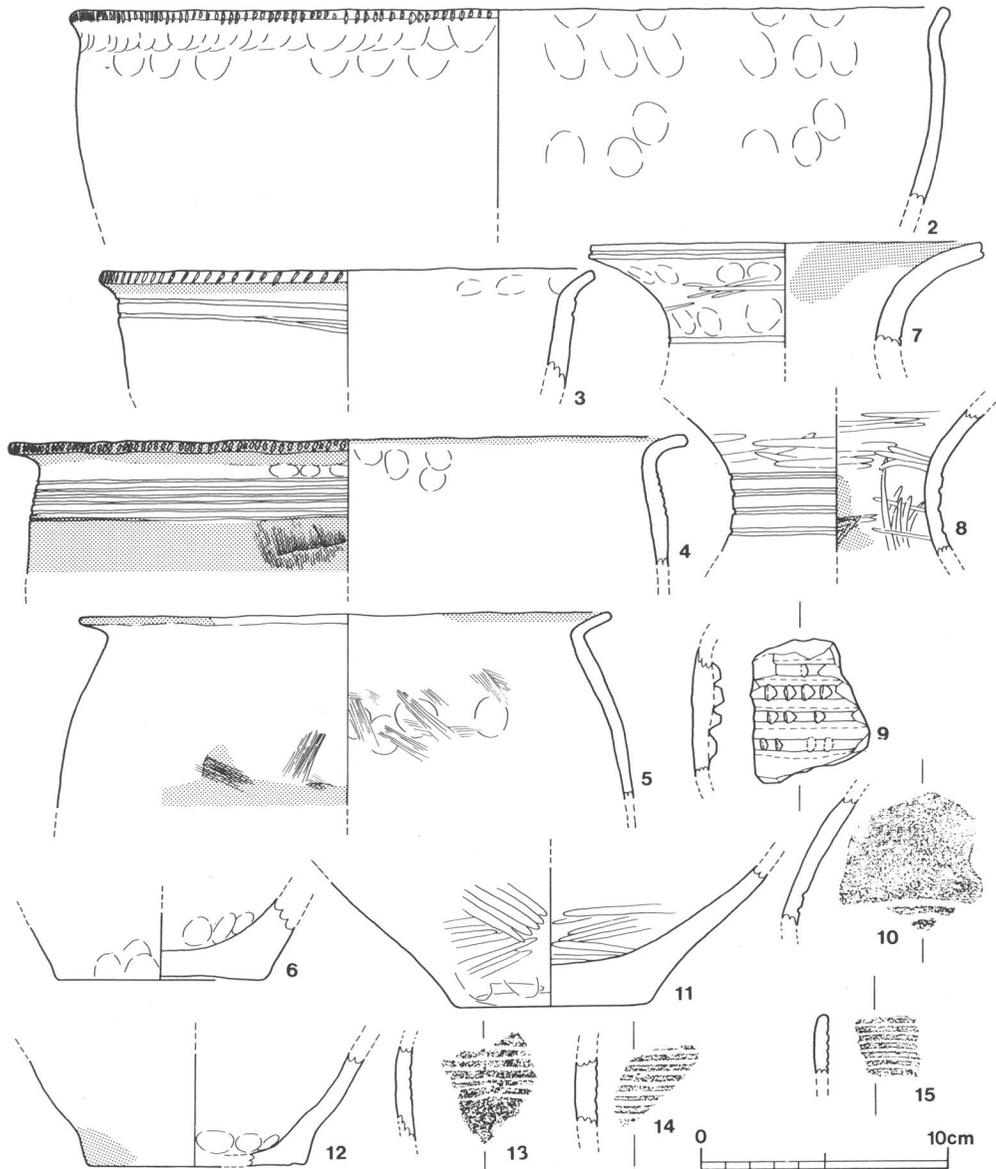
溝2 遺物は埋土を、上層、下層に分けて取り上げた。上・下層はそれぞれ第4図、2・3層に対応する。



第7図 遺物実測図

(上層) 2・3・4・5は、甕である。いずれも口縁部を外反させるが、

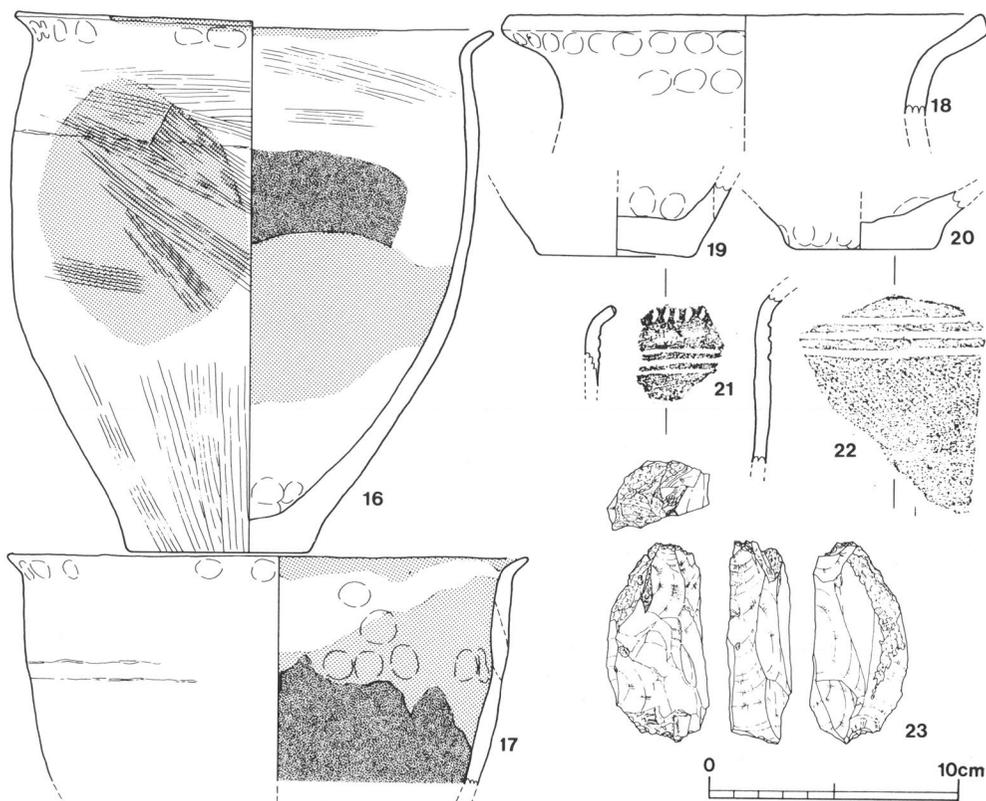
(溝1 S=1/3)



第8図 遺物実測図(溝2上層 S=1/3)

4は倒L字形の口縁をもち、5は鋭く屈曲する。2・3・4は口縁端面に刻み目を施し、体部上端に、3は2条のヘラ描沈線文を有し、4は縦方向のハケ（8本/cm）の後6条のヘラ描沈線文を施文する。3にはヘラ描沈線文のつなぎめがみられる。切り合い関係からヘラは右から左の方向に移動したことがわかる。13は甕体部上端部である。6条のヘラ描沈線文を施文している。6は甕底部である。7・8・9・10・14は、長頸壺の口縁部・頸部である。7は指押さえ整形の後、非常に粗いヘラミガキを施す。また、口縁部内外面に赤色顔料の痕跡が認められる。口縁端面に1条の、頸部に1条以上のヘラ描沈線文を施文する。8は内外面ともにヘラミガキを行い、頸部に4条以上のヘラ描沈線文を施文する。10は2条の、14は5条のヘラ描沈線文が遺存する。9は4条以上の貼付突帯を有し、突帯には刻み目を施すものである。11・12は、壺底部である。15は器種の特が困難である。口縁端部近くまでヘラ描沈線文を施し、6条が遺存している。

（下層） 16・17・19・21・22は甕である。口縁部の形態が判るものについては、いずれもこれを外反させ、端部は丸い。21は端部に刻み目を施す。17は表面の磨耗が激しく調整技法は不明瞭であるが、16はハケメが明瞭に残る。体部上半は左上がりの方向にやや細かいハケ（6本/cm）を、下半は下から上に縦方向のやや粗いハケ（7本/cm）を施す。また、16・17の内面には、口縁部上端より下にそれぞれ6cm・5cmの所を上限として、炭化物がこげついて付着している。18は壺口縁



第9図 遺物実測図（溝2下層 S=1/3）

部である。わずかな遺存残部分から復元図化した⁽²⁾が、口縁部が比較的弱く屈曲して外上方に広がるものである。胴部がやや縦長になるものかと思われる。20は壺底部である。23は楔形石器である。上下両端に階段状剥離痕がみられる。

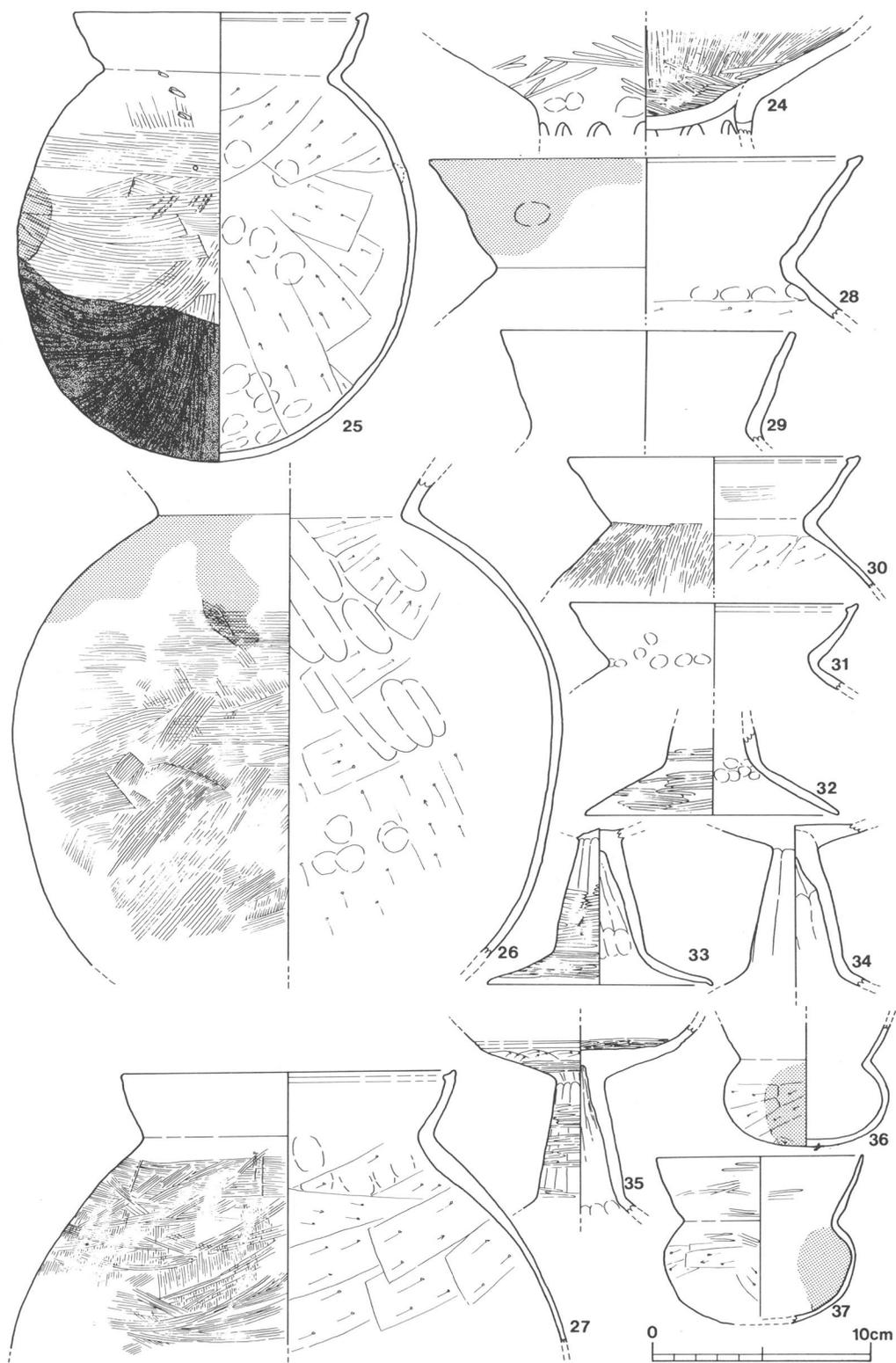
以上のように、溝2上層の出土遺物は、甕の体部上端のヘラ描沈線文の多条化の傾向、壺頸部の発達、貼付突帯の存在などの特徴から畿内第I様式新段階に相当する。また下層の土器については新段階と確定しうる資料がないことから上層の土器に先行する可能性がある。

自然河道 前述のように、自然河道は遺構底までは掘り切っておらず、遺物はすべて埋土上位出土のものである。出土層位は、第14層を中心としている。

24は弥生時代中期の台付鉢である。鉢部外面の遺存状態が悪く調整技法は不分明であるが、指頭による整形の後、横方向に粗いヘラミガキを施しているようである。内面はヘラミガキを重ねて調整する。脚台部には径1.1cmの円形のスカシが5箇所⁽²⁾に遺存していたが、スカシ間隔により復元すると本来15方に穿っていたものと考えられる。鉢部と脚台部の接合は円板充填法によっており、脚台部内面をヨコナデで調整してから鉢底部を接合するものである。スカシ穿孔に際して生じる粘土のはみ出しは、このヨコナデ時に消し取っている。また、鉢部外面に僅かに赤色顔料の痕跡が残る。当該資料は自然河道出土遺物のうち唯一弥生時代のものであり、次に述べる布留式土器とは時期差があるが、この土器は破面が丸く磨滅しており、ローリングを受けているものである。

25・26・27・30・31は甕である。口縁部の形態が判る25・27・30・31についてみると、いずれも口縁部が上外方に広がり、端部は肥厚し内傾した面をなす。体部については、25・26は球形を呈するが、27・30はやや長胴形を呈するものであろう。外面の調整は、30を除いて、ハケの後に肩部より上をヨコナデにより仕上げている。ハケの方向はタテ、ヨコ、ナナメを用いるが、ヨコハケでは右から左へを、タテハケでは下から上へを原則としている。また25では肩部でタテハケの後にヨコハケを行っている状況が看取できる。内面のヘラケズリは、25・26は下半を左上がりの方向に上半を右上がりの方向に行っている。26ではヘラケズリの後に左上がりの方向にナデを加えている。また、25について、肩部と胴部の境界付近に、焼成後径約2mmの小孔を穿っている。肩部にはヘラ先で器壁を刺突した痕跡が3箇所に残る。体部下半は煤が全面に付着している。28・29は、壺の口縁部である。28の口縁部は頸部から直線的に伸びて外上方に開く。口縁端部はヨコナデによりやや肥厚し僅かに内傾した面をなす。29は28に比してやや直立ぎみの口縁部であり端部は丸くおさめる。

32・33・34・35は高杯である。完形もしくはそれに近い状態で出土したものはない。杯部の状態がかろうじて判るものは35のみである。底部と口縁部の境界に不明瞭な段を有する。外面はヘラケズリの後横方向にヘラミガキを行い、内面は横方向のヘラミガキを施している。脚部の形態は、柱状部について、35は比較的直線的に広がるが、他は下半部で膨らみをもつ。裾部はいずれも大きく広がるが、柱状部との境界に稜をなして屈曲するのは35のみである。脚部の調整は、34以外は外面は横方向にヘラミガキを施す。34については表面の摩耗が激しいために不分明であるが、ヘラミガ



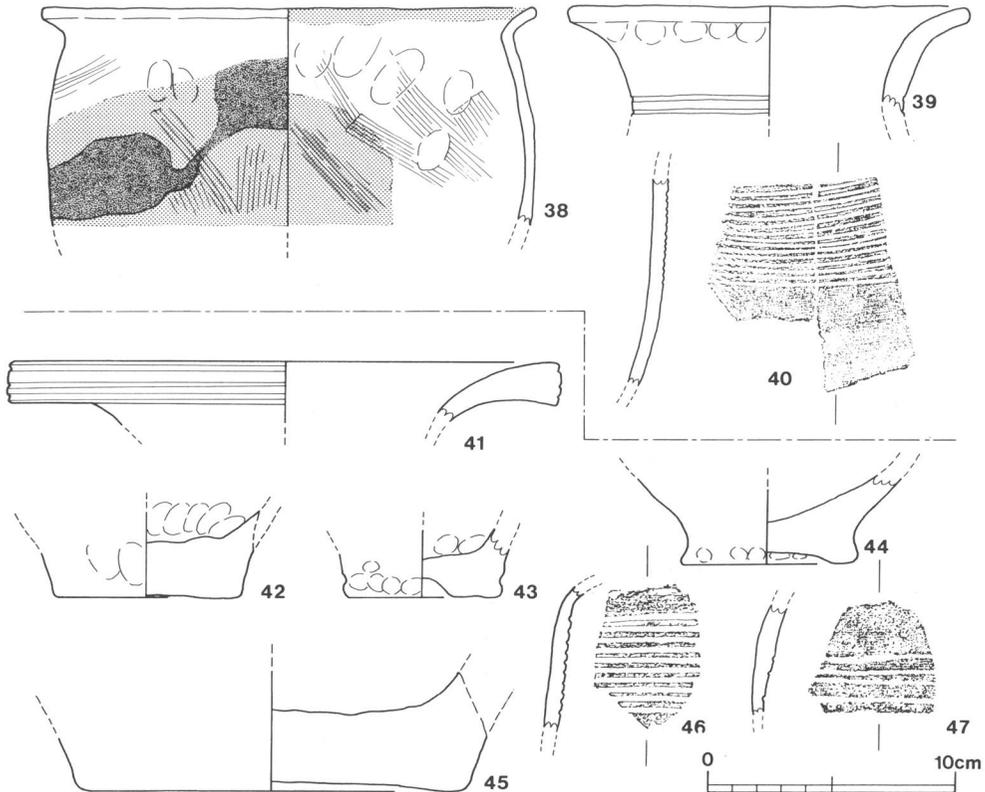
第10图 遗物实测图(自然河道 S=1/3)

キを行わず、ナデで仕上げているようである。ミガキを加えていたとしても極めて粗いものである。内面は、柱状部はシボリメをナデにより消しており、裾部はヨコナデで仕上げる。33の裾端部は、強いヨコナデにより下方に突出するものである。脚部と杯部の接合は挿入法によっており、35・34は心棒を使用した痕跡が残る。

36・37は小形丸底壺である。37は口縁部は外上方に開き端部は薄く尖っている。体部はやや偏平な球形である。内、外面の調整は磨耗のため詳細は不明であるが、口縁部はヨコナデの後に粗いヘラミガキを施している。体部外面は口縁部との境界付近にヘラミガキを施すが、下半はヘラケズリの後ヨコナデにより仕上げている。36の口縁部は上外方に開き、体部は偏平である。外面の調整は口縁部はヨコナデによっており、体部はヘラケズリの後ヨコナデを加える。内面はヨコナデにより調整する。

以上の土器のうち24を除く他の土器は、小形丸底壺37などやや古い要素を残すものもあるが、明日香村・上ノ井手遺跡⁽³⁾SE-030下層出土の土器や柏原市・舟橋遺跡⁽⁴⁾O I出土土器に類例を求めることができる。また寺沢薫氏の編年⁽⁵⁾では布留3式に相当するものである。供伴する土器に須恵器が存在しないことから、須恵器出現直前の土器群に位置付けることができよう。

包含層



第11図 遺物実測図（包含層 上；40・41層 下；第21C層 S=1/3）

(第40・41層) 第4図に示した第40・41層出土の土器である。図示した遺物は主に同層中、E区において検出したものであるが、41層はS区に連続して溝1の遺構ベース面になるものである。

38は甕である。口縁部は上外方に屈曲する。内外面はハケの後ナデを加えて調整する。体部外面上半部に煤が付着する。39は壺の口頸部である。口縁は外反して開き、端部は丸い。内外面をナデで仕上げ、頸部外面に2条以上のヘラ描沈線文を施文する。40は甕体部上端部分である。14条のヘラ描沈線文が残る。

(第21c層) 第4図に示した第21c層出土の土器である。

41は、壺口縁部である。口縁部は外反して開き、端部は下方にやや肥厚する。口縁端面に3条の凹線文を施している。42は甕底部である。43は焼成後底部外面から径1.8cmの孔を穿とうとして、穿孔途中でやめているものである。甕に転用しようとしたものであろうか。44は底部を指先でつまみ、上げ底としている。45は底径15.8cmを測る大形壺の底部である。46は甕体部上端部分である。10条以上のヘラ描沈線文を施す。47は壺頸部である。4条のヘラ描沈線文が残る。

これらの土器のうち、46などヘラ描沈線文を有するものがある一方で、45は凹線文を施しており、口縁部の形態からも畿内第Ⅲ様式新段階に比定できるものである。この包含層の形成時期は弥生時代中期とみなされよう。

註1 佐原真「近畿地方」(『弥生式土器集成』本編2、1968年)

以下、弥生土器の編年については同書による。

- 2 藤田三郎・松本洋明の両氏の編年では、大和Ⅱ-1様式に該当する(藤田三郎・松本洋明「大和地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、1989年)。両氏は様式設定に際して、従来のような文様による大別を廃して、主要土器の形式とセット関係を重視し、従来の第Ⅰ様式新段階を第Ⅱ様式と認識している。これによってヘラ描沈線文の多条化は第Ⅱ様式に包括される。しかし、例えば、同書で河内地方を扱った寺沢薫・森井貞雄の両氏は第Ⅱ様式を「櫛描文の確立と器形の多様化が進む段階」と規定しており、現段階では第Ⅱ様式のメルクマールについては研究者間で相違が見られる。したがって、本報告書では従来の編年に従うものとする。
- 3 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60巻第2号、1974年)
- 4 原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真『舟橋』Ⅱ(1962年)
- 5 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(「矢部遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊、1986年)

IV まとめ

今回の調査は、調査面積が狭いなどの制約があったものの、多くの成果をあげることができた。

その第1点は、弥生時代前期の遺構の存在を確認し得たことである。当該期の遺跡は、鴨波遺跡が知られていたが、その出土点数は少なく、大和の弥生土器の編年作業においても空白地域として扱われている。検出し得た資料は点数も少なく、編年研究等の資料として供するにはなお今後の調査をまたねばならないであろう。しかし、検出した遺構は溝であり、ここに意識的に土器が廃棄

された可能性があると考えられたことは、この周辺に集落跡が広がるものとみて、ほぼ間違いないと思われるのである。

第2点は、弥生中期の遺構及び遺物包含層を検出したことである。ただし、必ずしも畿内第Ⅱ様式の良い資料が見い出せなかったため、集落の継続的な営みを確認できなかったが、前期に引き続いた形での中期の土器の検出は意義深い。また中期の土器は前期のそれに比して出土点数が少なかった。このことは、先に挙げた鴨都波遺跡と好対照をなす。鴨都波遺跡は当遺跡の北方約1.5kmの地点に存在するが、ここでは中期のおびただしい量の土器が出土しているのであって、当該期に集落は活況を呈するのである。もし中西遺跡が中期段階に集落規模を縮小していくのであれば、弥生時代の拠点集落の移動など、興味深い問題が生じよう。本遺跡に関する知見が極めて少ない現段階では、これ以上の言及はできないが、周辺地に広がるであろうと予想できる両遺跡のもつ生産区域についての問題も含めて、今後の調査・研究がまたれるのである。

さて、調査成果の第3点は、本遺跡に南接するネコ塚古墳、その主墳である宮山古墳の築造期に該当する時期の土器の検出である。当初、調査地の南に農業用道路を隔ててネコ塚古墳が存在することから、本墳にかかわる何らかの施設の存在を予想したが、その兆候は全く認められなかった。しかし、N-2区で当該期の河道を検出した。

河道は、底までを掘り切っていないので、出土土器は、厳密には河道の形成時期を示すものではないが、第10図25・35・37のようにほぼ完形もしくは1/2以上が残存していたものがあつたことは、土器自体が大きな移動を伴っていないことを示しているものであり、これらの土器に河道の存続期間の一点を求めることができよう。また、このような土器の出土状態から、土器が上流から流れてきたものではなく、周辺から落ち込んだものであると考えられ、近辺に何らかの遺構が存在することが推定できるのである。今回の調査ではこのような遺構はその痕跡すら見い出せなかったので、本遺跡の当該期の状況をこれ以上知ることができないが、宮山古墳・ネコ塚古墳築造にかかわる遺跡が存在する蓋然性は極めて高いと考えられよう。

いずれにせよ、今回の調査で中西遺跡のもつ性格の一端が知り得た。より深い検討はすべて今後の研究にまたれるのであるが、調査結果をみれば、弥生時代から古墳時代にかけての当地域の歴史を知る上で、本遺跡の重要性が今まで以上に強調される必要があるといえよう。



1. 調査前全景（南東から）



2. N2区全景（南から）



1. N区全景（東から）



2. E区全景（南から）



1. S区全景（東から）



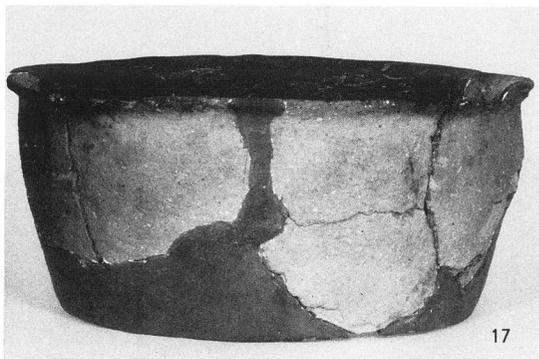
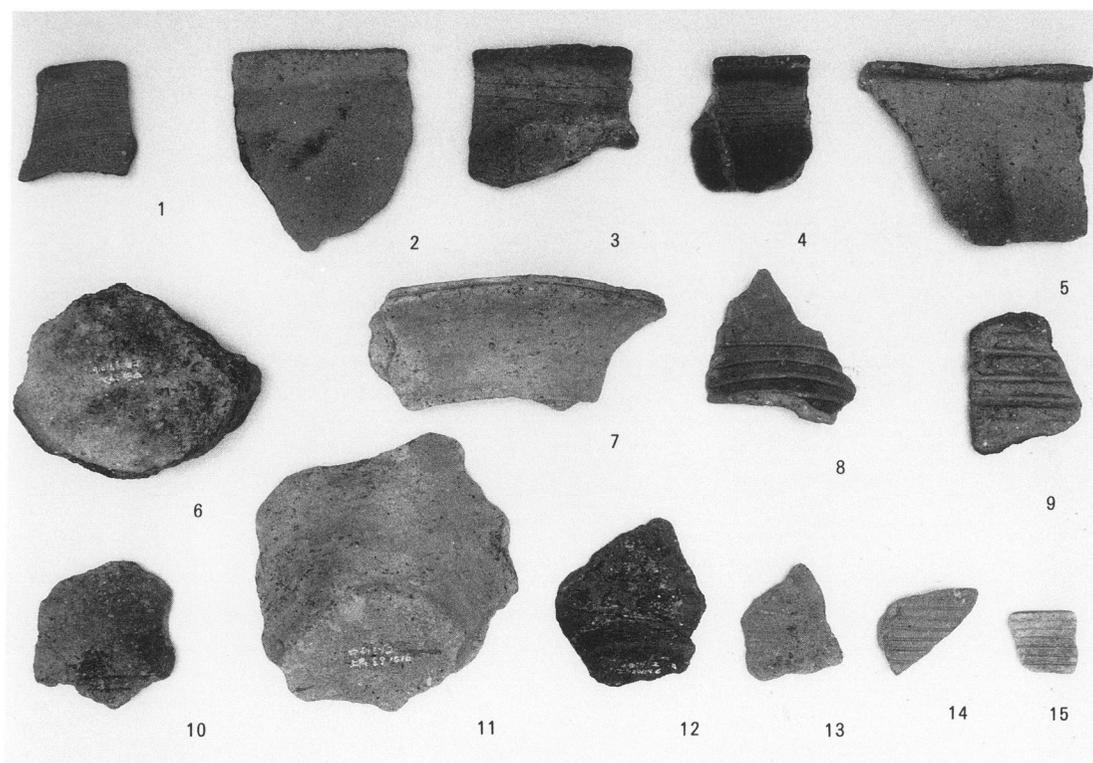
2. 溝1 検出状況（南上方から）



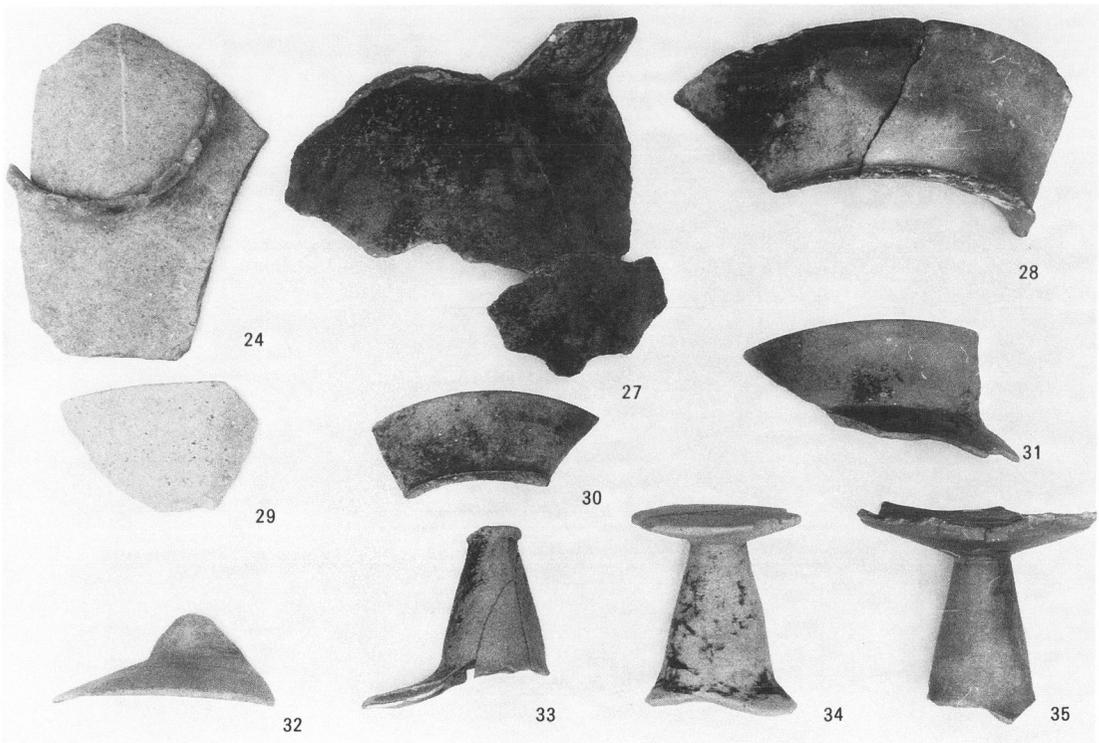
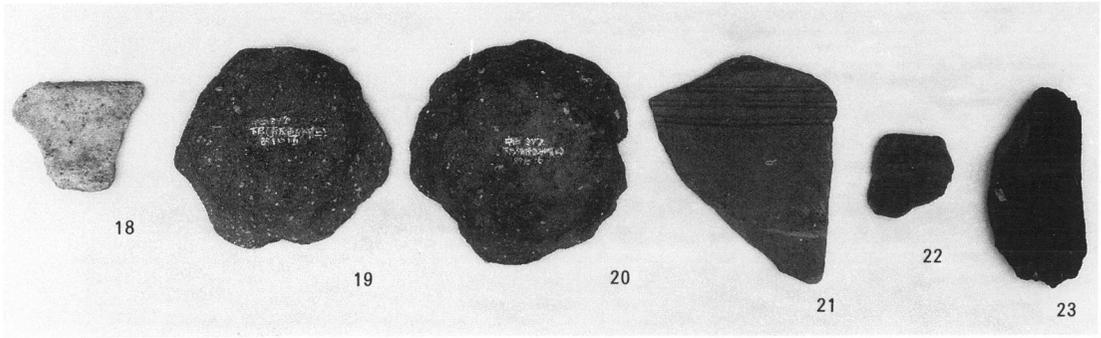
1. 溝2 検出状況（南上方から）



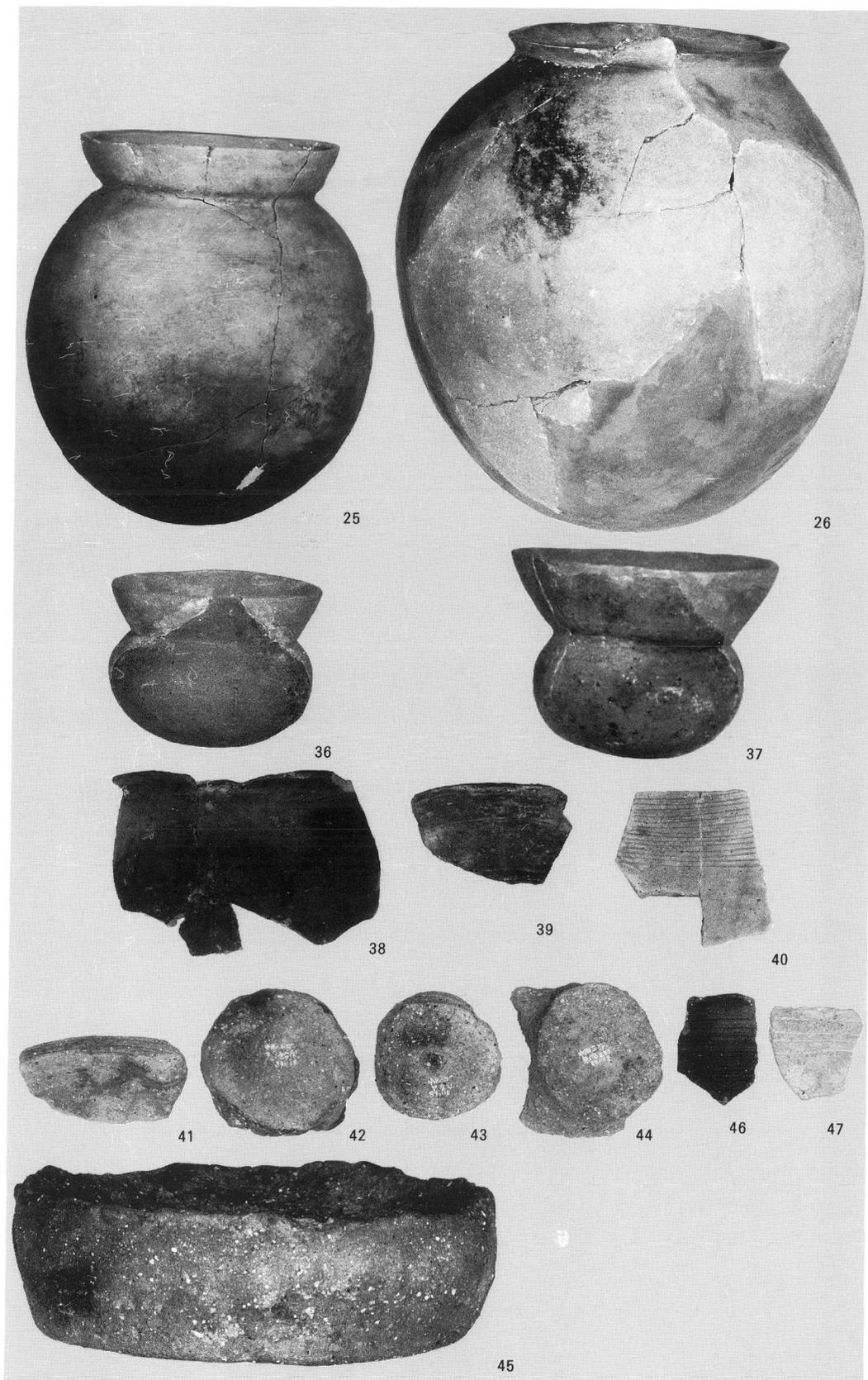
2. 溝2 下層遺物出土状況



出土遺物 (S = 1/3)



出土遺物 (S=1/3)



出土遺物 (S = 約 $\frac{1}{3}$)

奈良県御所市室
中西遺跡 —第2次発掘調査報告—
御所市文化財調査報告書 第9集

平成2年3月31日

編集・発行 御所市教育委員会
御所市三室117番地

印刷 明新印刷株式会社
奈良市橋本町36